ことばを聞き、ことばを読む身体が直接に生きている世界がある。その身体でじかに生きている世界とは別のところにことばの世界が立ち上がって、人の世界を二重化する→ことばの世界と身体の生きる世界の二重化
ただ二重化とは言っても、二つの世界がまったく別個のものになるのでも、また二つの世界がそのまま二重写しになるのでもない。

図と地

※心理学でいう図と地の概念
人間の知覚現象はつねに、意識がテーマとして向かう図と、その背景となる地に分節する
ことばの世界が図として立ち上がるときも、その図がそれだけで成り立つのではなく、そこではつねに身体で生きる世界が地になっているのである。

視点を重ねる

◎さらに正確に言えば、ただ単にその光景が脳裏に浮かぶというのではない。
写真を見るとき私たちは、ただそれを眺めているだけであるように見えて、じつは撮影者の視点に自分の視点を重ねている
ことばを聞き、また読むときも同じことが起こる。
ことばの主の視点に自分の視点を重ねるようにして、ことばを聞き、その世界を立ち上げる

⇦

●書く人のそのときの世界と書かれた世界、読む人のそのときの世界と読みとられる世界とが二重化している。
そうして平面的な紙のうえに書かれた文字が、立体的な世界をそこに立ち上げる。
●このことを確認したうえで、この作品の世界にはこれを書いた「私」の視点が貫かれ、読む人はそこに自分の視点を重ねるかたちで、ことばの世界を捉えている事実を見なければならない。

そうして自分の側の状況を地に沈め、ことばの世界に入り込んでしまったそのなかで、ことばが立ち上がり、そのことばの世界を貫く視点に、読むものはおのずと自分の視点を添わせている。

ことばは、声で語られても、文字で刻まれても、それそのものとしては一次元の音の流れ、あるいは二次元平面上の模様の羅列でしかない。ところがこれを聞き、これを読むものには、声の主、仕草の主がそこに立ち上がって見えてくる。
いずれにしてもこれを読むとき無視点ということはありえない。立ち上がった立体の世界があり、それゆえにこそ、その立体的な世界を眺める視点がどこかに据えられる。そのようなかたちで人間のことばは現象する。